

【報告②】

日本に影響を与えたドイツ人建築家たち

堀内正昭*

目次

研究のきっかけ	煉瓦製造
デ・ラランデのこと	ドイツ積み
エンデとベックマン	法務省旧本館の復原
歴史主義	防火床
官庁集中計画	碇鉄構法
ベックマンの『日本旅行記』	ドイツ小屋
日本人建築家のドイツ研修	ドイツ小屋の事例
エンデ&ベックマン建築事務所	国会議事堂
諸官庁建築案	仮議事堂の復原模型
法務省旧本館(旧司法省)とサインの意味	ドイツへの日本の影響
様式の節目	

研究のきっかけ

堀内でございます。本日第1部の講演者の坂本勝比古先生と、第3部でお話される堀勇良先生、なにか質問があったら聞くことにしています。堀先生なんかはもう知識の泉ですから、すぐ答えが返ってきます。今回、発表させていただく中にもこのお二方の知識を借りておりますので、ここでちょっと感謝申し上げます。

私に与えられたテーマですが、日本に影響を与えたドイツ人建築家には、皆さんご存知のブルーノ・タウトがいますけれども、ここでは時間のこともございますし、デ・ラランデと関連付けたいので、およそ明治時代というふうに限ってのお話をさせていただきます。私は大学院の学生時代にドイツ留学をして、ベルリン工科大学に在籍しました。この工科大学の前身がありまして、そこに今回登場する人達が多く在籍しておりました。私は、そんなことは行ったときは知らなかったのですね。

実は、ヨーロッパのことを勉強したくて留学したわけですが、向こうに行くと、日本のことを聞かれるのですね。それは、当たり前っていったら当たり前ですが。こちらには十分な知識

*昭和女子大学生生活科学部生活環境学科教授

がないってことに恥じ入るわけです。日本建築でちょっと話してくれませんかというのが一番困る依頼だったのです。まあちょっと民家の話をしましたけれども。

それから、2年間いると日本のことがやっぱり気になりました。留学したのはもう4半世紀前ですが、そのときになにか研究できないかなと思って、お雇い外国人、この人達をやるうとすることをドイツにいたときに感じました。日本にいた時は全然興味なかったのですけれど。それで、ドイツのことをやりはじめました。日独の橋渡しというか、ああ、それなら日本人がやってもなんらかの貢献ができるだろうと思ひましてね、はじめた次第です。

で、今日の主人公のエンデとベックマンという人、そしてその周辺をお話したいと思ひます。実は、こういう研究は、堀先生と一緒に藤森照信先生という人がいらっしゃって、研究をやっていました。だから、私なんかもう研究やる余地がないだろうと思ひながら興味本位ではじめると、日本における足跡が分かっただけで、ドイツで何をやってたのかとか、ドイツでどんな作品を建てていたのかという、本当に基本的なことすらわからなかったというのが、4半世紀前の大体の状況です。

これはドイツに限らず、多くの日本に関係した建築家達もたぶんそうだったのだろうと思ひます。そして、今、そういう研究が本当にすべて終わっているかという、やっぱりそうじゃなくて、今日のデ・ラランデもよく分からない人々の一人ということになるわけであります。今後、日本に足跡を残した人達の本国で、あるいは帰国後ということも含めて総合的に評価し、そして日本の業績は何であったのかなということを明らかにしないとこの研究は終わらないだろうと思ひます。これはできたら坂本先生の生きている間にですね、私も少しでも明らかにして成仏していただけたらと、今日思ひました。失礼しました。で、若気の至りもありましたけれども、1989年に本を出しまして、まあ、それから随分経っちゃいましたけれども、『明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン』という単行本です。もし、興味をもたれた方は、井上書院でこの本が出ておりますのでお求め頂ければと思ひます。

デ・ラランデのこと

私はこういう講演会する度に何かですね、本邦初のことも言おうというサービス精神ございまして、それで今日ちょっと一つ持って参りました。実は、講演やってくれていうのを、夏休み前に受けましたので、今年、夏にドイツに行った時に、デ・ラランデの足跡があるかなと思って、ベルリン工科大学の図書館で調べました。すると「ビスマルク塔設計競技案(1897年)」(図1)という、彼が25歳の時でしょうけれども、来日する前の作品が一つありました。

ビスマルクは、例の政治家のビスマルクですが、二百件近い応募案の中で、実はこれ、箸にも棒にも引かからなかった全く選外の作品です。で、選外の作品がなぜ残っているのかなと思ひ不思議だったのですけれども、これ、印刷出版されているのです。まあ、選外になった人から

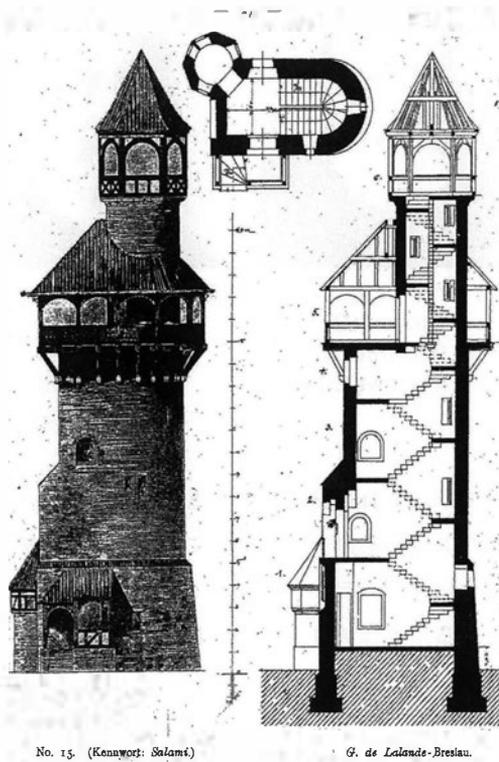


図1 デ・ラランデ:ビスマルク塔設計競技案(1897年)(Deutsche Konkurrenzen, VII-Band, Heft 8. No.80, Verlag von E.A.Seemann, Leipzig 1897)

も一つぐらい入れてあげようかなという親心で入ったのでしょうか。こういう作品がありました。

塔ですからそうなのでしょうが、上のほうに木造の展望台のようなものを置いてあり、上のほうが少しですねシンメトリーをむしろ避けたような、そういう設計案です。で、一等案ちょっとご紹介するとね、左右対称の、先に坂本先生がしきりにおっしゃっていたようなルスティカ(粗面)仕上げですね。上のほうにマチコレーション(突き出し狭間)を施した堂々たる左右対称の塔、これが当時いいと思われた一等案であります。デ・ラランデ案のようにちょっと崩してね、いろいろな木造の要素を入れる、これは後の、もしかしたら彼の作風になってくるのでしょうかけれども、早くも25歳の頃に芽生えていたということですね。彼の足跡は、もう少しあるかもしれませんが、とりあえずこういうのを探してきました。これは本邦初公開です。

こういうことからすると、彼、このままドイツで建築活動しても、あんまりうだつが上がりなかつたかもしれなくて、むしろ日本に来てやったほうが見合っていたかなという思いをしております。

エンデとベックマン

さて、エンデとベックマン。二人で一人称というか、二人一組のような形で語られることが多いのですが、エンデが3歳年上でありまして、この二人が共同でベルリンに建築事務所を開くということで、その名前をエンデ&ベックマン、通常エンデ・ベックマンというふうに略した形で言っております。だから、二人の業績を分かつということはなかなか難しいわけです。今日のレジュメには、エンデ&ベックマンの所員達を中心に、そのプロフィールをちょっとだけ書いております。先程の坂本先生の話の中ではリヒャルト・ゼールという名前も出てきましたが、多少触れたいと思います。

ヘルマン・エンデはベルリン工科大学の教授を長らく務める傍ら、事務所を開くプロフェッサーアーキテクトですね(図2)。ベルリンで最初に建築事務所を開いたのは彼らでありまして、結局、今のプロフェッサーアーキテクトの原型みたいな人です。



図2 ヘルマン・エンデ
(1829~1907)
(Berliner Architekturmuseum, 1908)

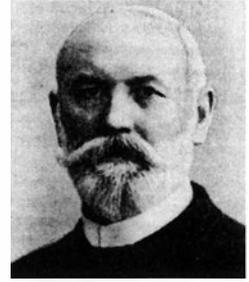


図3 ヴィルヘルム・ベックマン
(1832~1902)
(Zeitschrift für Bauwesen, 1903)

ヴィルヘルム・ベックマンのほうは、そういうアカデミックな役職にはついておりません(図3)。むしろ、実務的に、例えば今でも刊行されている「ドイ

チェ・バウツァイトウンク」という雑誌がありますが、それを発刊しようとした創設者の一人であり、それから、今もありますけれども、ベルリン建築家協会ですね、ここで長らく活動して一時期はその会長を務めるというふうに、そういうアカデミック以外の仕事としての影響力がありました。こういった二人が結びついたところに実は彼等の成功の秘密があったということでございます。

大体150件以上の設計をしております。まあ、それは決して多いわけではありませんけれども、十分な仕事量だったと思います。で、彼等は、特にエンデの方かな、長者番付に載るくらいにベルリンで成功しました。そういう人を日本が招いたということは、まあ、数あるお雇い外国人の中でもヒットだったと思っております。

これはエンデ・シュトラッセです。ベルリンの西方にヴァンゼーというところがあって、その辺りに地所を持っていたこともあり、そこにエンデ通りというのがあります。まあ、ちっちゃな小道で、べつに瀟洒な建物も立ってないようなところですけども。それから、同じようなところなのですけども、ベックマン橋。これは1976年にかけて直されていますが、名前はそのまま残されています。

彼等はたくさん設計しているので、いくつか紹介します。プロイセン土地信用銀行(図4)、1870年代です。それはドイツが統一されたビスマルクの時代ですね。ちょうど経済的には、バブルの時期に当たってきます。いろんな会社が乱立するってということで、グリュンダーツァイトといわれる時期なので、様々な会社が設立されていく。特に銀行なんかはその中でも代表的な存在で、彼等は計9つの銀行建築を引き受けるというふうな、時代の寵児みたいな感じなのです。



図4 プロイセン土地信用銀行（1871～74）（Milde,K., Neorenaissance in der deutschen Architektur des 19. Jahrhunderts, Dresden, 1981（Verlag der Kunst））

歴史主義

こういうスタイルというのは、19世紀の後半、歴史主義という言い方をするのが一番楽なのですけれども、様々な過去様式を採用するということです。そのときには、新古典主義であろうが、ゴシックだろうが、ルネサンスだろうが、どれかを上位とする考え方ではなくて、その建物に相応しいと思われた様式を建築家が取捨選択する、時には様式が混ざることもありますけれども、そういう過去様式との向かい方ですね、それを歴史主義とっております。

プロイセン土地信用銀行は、全般的にはルネサンスのデザイン。少しですね、張り出し部分を設けた点において、ちょっと押し出しの強さを示しておりますけれども、まあルネサンスのリバイバルです。次に動物園、実は動物園というのはおもしろい対象なのです。ベックマンは終生、動物園協会にいて、まあ、最後は会長にまでなるくらいに動物園が好きだったようですね。で、実はね、ベックマンの玄孫ぐらいの人に、私はかつてベルリンでお会いしたことがあります。晩年は動物園に行って、子ども達にアメ玉をあげるのが好きだったというような、そういう話を聞いております。

次は象舎（図5）、これも歴史主義と関係しております。つまり、象、ここではインドを念頭において考えておりますけれども、インド象ですね。インドから何をとってくるかという、



図5 ベルリン動物園 象舎 (1873) (Landesbildstelle Berlin)

ヒンズー教の寺院をもってくるということです。まあ、動物園は一つの見せ物ですけどもね、こういうのも19世紀後半の広い意味での歴史主義の産物です。これはベルリンの目抜き通りのウインター・デン・リンデンに開業した喫茶店カフェ・パウアーです(図6)。まあ、ちよとごてごてしたスタイル、それからマンサード風の屋根。こういうのを歴史では第二帝政式という言い方をしまして、19世紀の中頃以降、パリを中心にして流行るスタイルで、こういうのが来ています。

つまり、時々の時代に敏感に対処している。これは、民間で建築事務所を開いていたっていうこととも関係しているのでしょう。そういう意味で、こういう人達を呼ぶということは、日本に歴史主義といったものを、紹介するということになってくるわけです。

これは民族博物館(図7)。実は戦後しばらく残ってしまっていて、今のように保存運動がさかんだったなら残った価値のある建物だったのですが、壊されてしまいました。角を利用して、少し押し出しの強さでネオ・バロック調のデザインになりつつあるかなというところに抑制をきかせたような建物です。これは、デッサウ。昔はアンハルト＝デッサウと呼ばれましたが、皇太子の宮殿として建てられたものです(図8)。これも第二次大戦でなくなってしまいましたけれども、日本に今残っている法務省の建物、これに一番近い建物です。そのまま持ってきたかなというような建物でございまして、紹介しておきます。



図6 喫茶店カフェ・パウアー (1876) (Landesbildstelle Berlin)



図7 民族博物館 (1880~86) (Landesbildstelle Berlin)



図8 アンハルト・デッサウの宮殿（1883～86）（Deutsche Bauzeitung, 1886）

それから、ベルリンのブランデンブルク州議会の建物です。敷地の制約もあって奥行きのある建物で、多少フランスの第二帝政式も見えますが、割と抑制のきいたルネサンスのリバイバルです。

官庁集中計画

こういう作品を設計している人達を日本に招くわけです。日本に堂々とした建物を建てる、それは日本が幕末に結ばされた不平等条約、それを改正するためなのです。特に外務大臣の井上馨、この人が自ら建築局をつくりまして、それで官庁建築を造ろう、そのためにそれに相応しい建築家を呼ぼうということです。最初はジョサイア・コンドルに設計案を作らせましたけれども、どうも気に入らなかつたらしくて、彼等を呼ぶことになります。

呼ぶに当たっては、やっぱり橋渡しをする人がいたわけでありまして、松ヶ崎萬長です。この人、堀さん、後で言ってくれるかどうか分かりませんが、彼はベルリン工科大学に留学していました。エンデがそのとき教えていましたから、松ヶ崎が帰国後、井上馨がつくった臨時建築局に入局した時に、ドイツだったらこういう人がいるということをサジェッションした可能性が十分にあります。

で、バックマンが1886年、明治19年に来日しまして、2ヶ月の間にいろいろな事をします。官庁集中計画案と呼んでいます。この計画では、皇居、それから霞ヶ関、日比谷、上の方には

築地があるというような地形ですけれども、そこに道路網を配しています(図9)。当時、19世紀の後半で有名な都市計画は、パリとウィーンです。

これは1860年代に、ベックマンが自ら属している建築家協会で、パリの報告をしたときにつかっていたダイヤグラムです(図10)。こういうふうによく大きく東西南北を貫くような大通り、交差点に放射状に集まる道路、それから環状道路があります。こういったものを彼は紹介しております。こちらはウィーンの改造計画で、リンクと呼ばれるのがこの通りですね。ここに市壁があったわけですが、それを取っ払って、その跡地に公共建築や官庁、美術館などを建ち並べていく。これはパリに比べれば、建物が道路にゆったりと建ち並ぶような、そういう計画をしております。

それでベックマン案をみると、中央の大通りを放射状に集まる道路の起点としまして、パリ型の道路計画をしようとしています。それからね、実はこの計画はもっと大きかったようで、環状道路を通そうとした後がありまして、ずっと本郷あたりまでいったらいいですね。残されているのは、そこまでの図面ではありませんが、まあ、こういう観点から、当時の二大都市パリとウィーンの計画を東京に持ってきたというふうなことになります。西洋式の都市計画は、ヨ

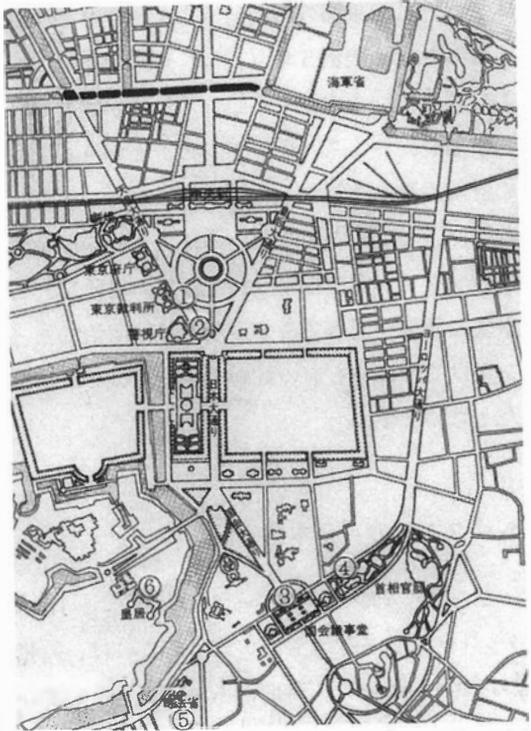
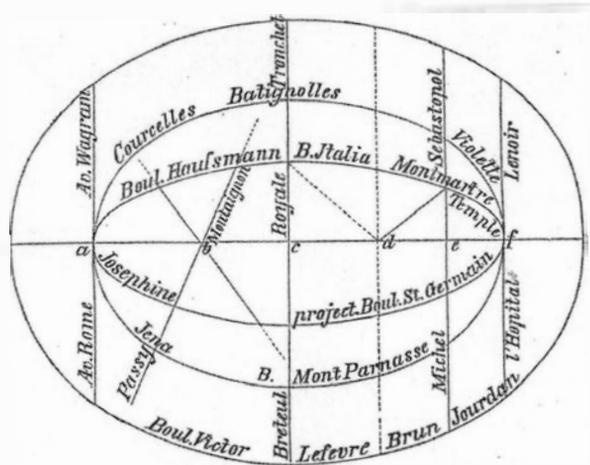


図9 ベックマン：官庁集中計画(1886)(石田頼房編：『未完の東京計画 実現しなかった計画の計画史(ちくまライブラリー68)』(筑摩書房、1992))



a. Arc de l'Etoile. b. Rond-Point. c. Pl. de la Concorde.
d. Pl. de la Louvre. e. Pl. de Chateaux. f. Pl. de la Bastille.
Die punktierten Straßenzüge sind projectirt und in Ausführung begriffen.

図10 パリ都市計画のダイヤグラム(『Zeitschrift für Bauwesen, 1868』)

本ではこれが最初の案ということになります。

もっとも、明治5年(1872)からウォートルスがつくったあの銀座煉瓦街なんかを、どんどん破壊していますから、これで計画が実行されるはずもなく、実は、ベックマンの翌年来日するジェームス・ホープレヒトという人ですね、その人がこの案を非難しまして、これは夢の計画になりました。

ただ、ちょっと興味深いのは、ここの国会議事堂の位置です。議事堂前的大通りとこの位置はベックマン案に指定された通りの場所に、これだけは変わっていません。実は、この国会議事堂の敷地が閣議で決まったのは、明治20年(1887)の4月とされているのですね。ベックマン案はそれよりも前の計画ですから、ベックマンの考え方がそのまま敷地の選定にもつながったと思います。

ベックマンの『日本旅行記』

ここに松ヶ崎萬長が写っておりまして(図11)、ベックマンが二ヶ月いた間、ずっとアシスタントの役割を果たしています。これは、箱根を旅行中のものでありまして、彼は、西は神戸から東は日光まで、時間があれば旅行をしています。何のためかというとな、もちろん日本建築を見るとということもありますが、石や煉瓦といった実際に建築材料になるものを探しながら行脚している、その一場面です。



図11 箱根旅行中のベックマン(右に松ヶ崎萬長)(Böckmann, W., Reise nach Japan, 1886(東京大学藤森照信研究室所蔵))

実はこの今の写真はバックマンが帰国後すぐに出した『日本旅行記』からのものです。これは私家版なので、世界に何冊もないというものです。確かこれね、堀さんが神田で探されたのですよね。これが藤森研究室にあって、ドイツ語で書かれているので誰も読む人がいなくて、死蔵されていたのですね。で、私が藤森先生のところに行って、こんな研究がやりたいのですと言ったら、いの一番にこれ読めって言われまして、えーこんなんあるんですかと言って、それで読みました。これで研究が飛躍的に進みましたので、まあ、もともとそれを発掘された堀さんの功績ということでございます。

日本人建築家のドイツ研修

バックマンが明治19年（1886）に来日して、帰国に際して日本人の建築家や職工を計20人、ドイツ留学をさせたいということを申し出るわけです。一部の人については、バックマンが直接払うというように相当熱を入れまして、20人が渡独します。でそのときにね、最初の宿にしたのがこのバックマンの自邸兼アトリエです。実はここ、今さかんにベルリンで開発が進んでいるポツダム広場とライブツイヒ広場、そこから一本北の道になお現存しています。

要するに一等地に自宅を構えていましたから、大変なお金持ちだったのです。この辺りは、ナチス時代の官庁街、総統官邸があったところで、徹底的に爆撃されたはずなのですが、なぜか奇跡的に残っているのですね（図12）。で、この建物を数年前に見学しました。空屋ですからなかなか見学するのは大変でしたけれども、これだけがぼつんと残っているのですね。で、こっちとしては、いつまで残のかとかいろいろ心配しまして、今も少し心配なのですけれども。どうやらこのライブツイヒ広場の近くの都市計画ではこの建物の高さが適用されて、なんとか残るといような状況でございます。

この建物に日本から来た人達がしばらく滞在しています。最初はドイツ語を学び、そしてここから職工さん達はそれぞれの専門職にしたがって、エンデ&バックマンと関係のある会社に、修業、見習いに行くといようなことをしています。それから、後で出てくるでしょうけれども、3人の建築家、河合浩蔵、妻木頼黄、渡邊譲、この



図12 現存する旧バックマン自邸（1886）（筆者撮影）

人達は建築家として行っていますから、それぞれこのアトリエの中で、ときにはドラフトマンとして仕事をしていた。そういうような関係で、実はこれ、日独の建築交流にとってもものすごく大事な建物なのですね。

で、そういうことをドイツ人に聞いても誰も知らなかったのです。知らないのはやっぱりこの建物の価値っていうことに関係するので、もう行く度に私は、これは大事なのです大事なのですって言ったら、最近では、割とそういうことも知られるようになりました。将来は、これまだ使い勝手が決まってないのですけれども、一つの区画でも部屋でもですね、日独の交流センターみたいなことで活用されると、これ以上幸せな活用方法はないかなと思っています。雨漏りはしていますしね、落書きはされていますけれども、ぎりぎりインテリアも残されています。

エンデ&ベックマン建築事務所

エンデ&ベックマン建築事務所にはいったい何人くらいいたのだろうかかと、色々調べたら、20人近くいただろうと思います。これは事務所の所員たちの写真です（図13）。日本人建築家の河合、妻木、渡邊がいて、来日したドイツ人建築家はここにはちょっと見当たらないのですが。例えば河合浩蔵、彼自身の言葉によりますと、彼は司法省の設計をここでやったということです。



図13 エンデ&ベックマン建築事務所の所員（日本建築学会図書館所蔵）

その司法省の主任建築家がエドガー・ギーゼンベルク、この写真のど真ん中にある人です。この関係で一つの計画をする。渡邊は裁判所をやりました。裁判所はこのアドルフ・ハルトツンクという人が設計主任で、彼のアシスタントをします。で、妻木は議事堂をやります。議事堂のほうはパウル・ケーラーという人が主任ですけども、ここには写っていません。

これらの所員達のなかで、このギーゼンベルク、ど真ん中にいますから、なかなか有能な人だったと思いますけれども、40代でもう死んじゃうのですね。それから、国会議事堂を設計したケーラーという人も早く死んでいます。まあそれは、たまたまかもしれませんが、それだけ日本で請け負った仕事量、これが建築家の命を縮めたのかもしれないなあと思えます。まあそれだけ、この事務所は、総力をあげて官庁集中計画に取り組んでいたのかなというふうに思っております。

諸官庁建築案

明治20年（1887）、今度は、エンデ、ホープレヒトやその他の人達が来日します。そのときに持参した印刷図面等が残っているわけです。これは全体を俯瞰したパノラマです（図14）。それからこれが、ケーラーが設計しました国会議事堂案（図15）。これは大きな着彩図面で、横2メートル超えるような図面です。これは警視庁案（図16）。ドイツのルネサンスのリバイバルですね。これが東京裁判所案（図17）。これもルネサンスにネオ・バロックをちょっと加味したような堂々たるデザインです。ほぼ、まあこういうのに従って東京裁判所は着工されます。

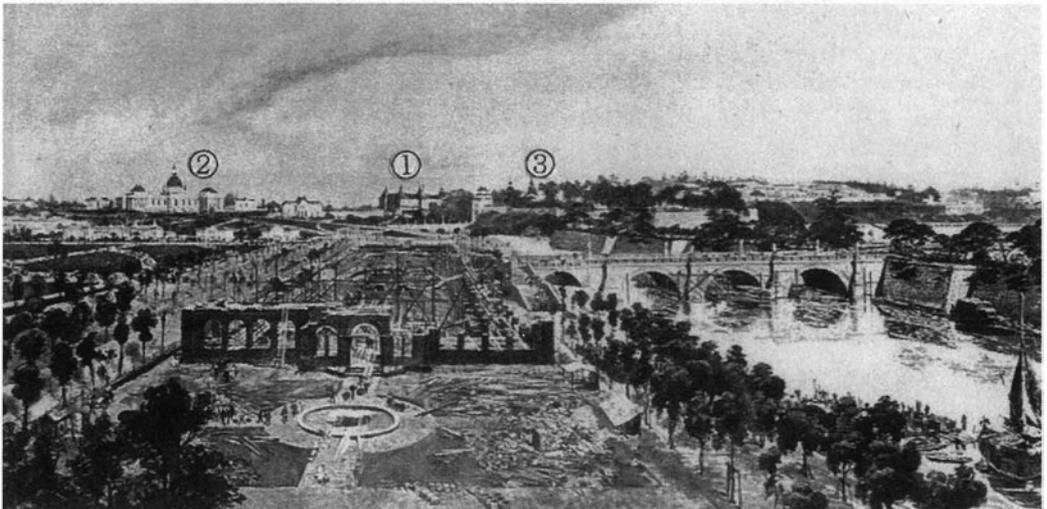


図14 官庁集中計画：①司法省 ②国会議事堂 ③皇居（Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung）



図15 国会議事堂案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

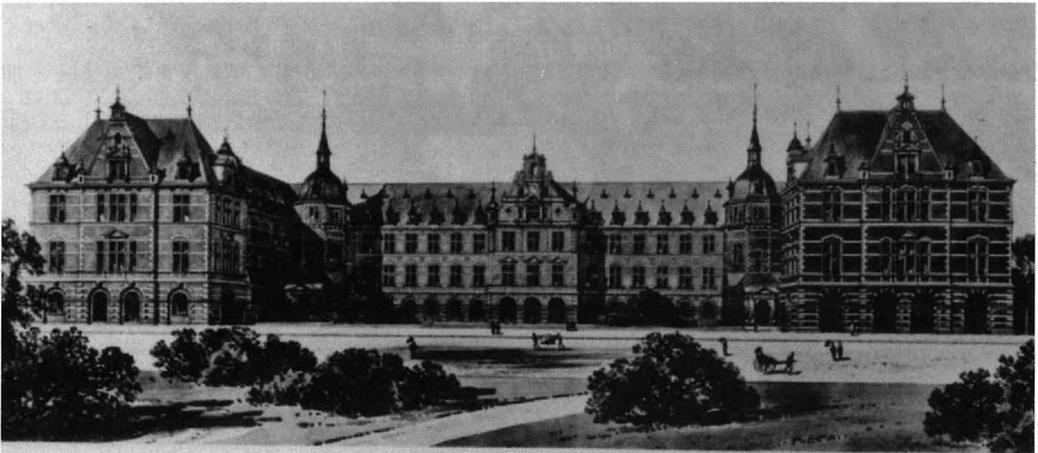


図16 警視庁案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

これでおもしろいのは、中央の待合室が吹き抜けで、第一審、第二審、第三審の各法廷がその周りに三角形状に並んでいるのですね。だから、非常に明確なプログラムをして設計しています。これは、国会議事堂案でもそうなのですが、こういうのが、彼等が日本に残した計画です。同時代の他の建築家の図面に比べ、非常に明瞭なプランニングをしています。当時の日本にあっては外交上大事な建物ですね。要するに単に、不平等条約の改正向けではなくて、日本人向けにもね、この建物は三審制のある建物であるということをプログラム上明瞭に見せ



図17 東京裁判所案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)



図18 司法省案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

ています。実は、こんな計画している裁判所は世界でこれだけしかありませんでした。

これは、ほぼこれに従って着工された司法省 (図18)。今は法務省と名前を変えています。首相官邸 (図19)。これは、イタリアのルネサンスですね。で、皇居案 (図20)。これはもう堂々たるネオ・バロックです。結局、まあ、そのうち実行に移されたのは2件で、国会議事堂は木造の仮議事堂で竣工するというふうに、ほんのわずかなことになりましたけれども。

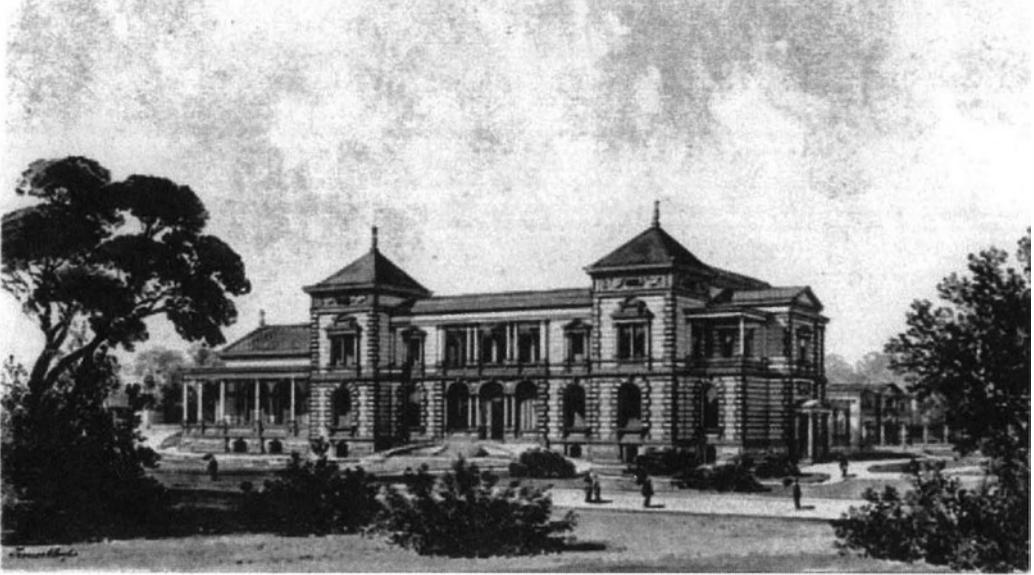


図19 首相官邸案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

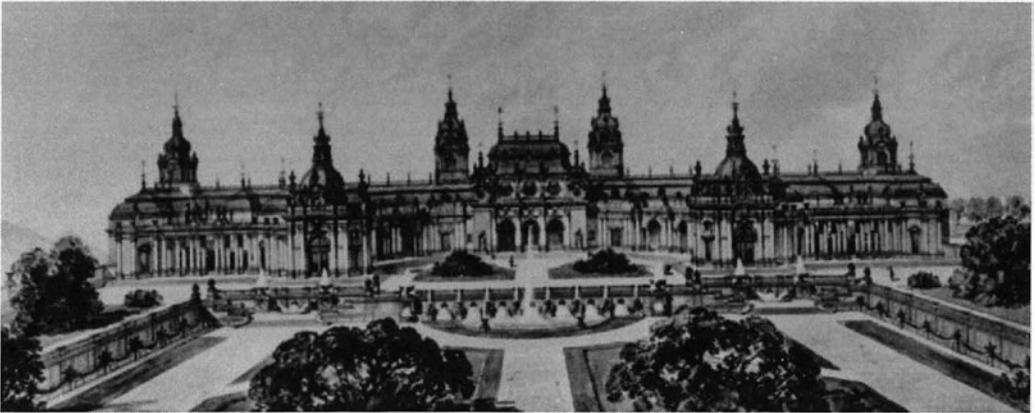


図20 皇居案 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

こういった様々な図案が、とにかく日本に来る。で、日本の高官達が見る。とりもなおさず、ドイツで留学した人達がそれらの下働きをしていますから、そういう人達が本格的に当時の一流の歴史主義様式というものを会得して日本に帰ってきます。まず、そこにエンデ&バックマンの及ぼした影響というのが認められます。

法務省旧本館（旧司法省）とサインの意味

これは実際に完成した、完成というよりも未だに残る司法省、現法務省旧本館の建物です（図21）。これは裏側から見ています。旧本館は、平成3年（1991）から5年かけましたかね、復原を目的にした改修工事を行いました。で、これはその図面ですけれども（図22）、ここにリヒャルト・ゼールというサインがあります（図23）。ゼールが、この司法省、今の法務省の建物に関係していることが分かります。1893年3月、東京と書いてありますね。それから、元々の設計主任であったのがギーゼンベルクです。彼は、実は来日しても良かったのですけれども、病弱のためついに果たせなかったのです。その間、ベルリンから一生懸命図面を書いては送るというふうにして、この法務省の設計に携わっています。この図面にはgez. Ende & Böckmann, Giesenberg, Berlin, 20. Jan. と書いてあります（図24, 25）。1888年1月20日、エンデ&ベックマン、ギーゼンベルク、ベルリンです。

実はね、最近気が付いたのですけれども、この署名のうちのgez、これはゲツァイヒネット gezeichnetの略だと思いますが、たぶん、ギーゼンベルク署名という意味でしょう。なんでそういうことにこだわるかという、実はね、ヘルマン・ムテジウスという、この人20代で、エンデと共に来日して、しばらくいた人ですけれども、この法務省の一図面に彼のサインが入っているのですね（図26）。これはムテジウスと確認できる唯一の図面なのですが、ges.



図21 法務省旧本館（旧司法省，1888～95）（筆者撮影）

図22 司法省中央棟屋根架構図（神戸市役所所蔵）

Muthesiusと署名している（図27）。ここでは、GEZではなくてGESなのです。これは、ゲゼーエンgesehenの略だと思うわけです。ゲゼーエンになるとね、閲覧するという意味なのです。そうなると、先ほどのゲツァイヒネットの略とちょっと意味が違ってきまして、既に誰かが書いた図面を、まあ、とりあえずムテジウスなる人が見たというふうな意味に変わってきます。

図23 ゼールの署名（神戸市役所所蔵）

今まで気が付かなかったのですけれども、ムテジウスは確かに法務省に関与したのだらうなどと言われていますけれども、こういうことからするとね、積極的に図面を書いたのではなくて、たまたま見るといようなそういう関与の仕方かなと、まあ、ここ2、3日ですけれども考えております。

様式の節目

ムテジウスは、ドイツ福音教会（1895～97）ともう一つ新教神学校（1890）を残しておりますが、どちらも大震災と第二次世界大戦で残っておりません。まあ、今日最初に話しがありましたデ・ラランデとは、僅かな時差です。要するにセセッションの時代、先の坂本先生の話によると、そういう活動が世紀末のウィーンなりミュンヘンなりで起こってきますけれども、やっぱり、それ以前は相変わらず歴史主義の作風なのです。だから、こうした歴史主義の人達とデ・ラランデとはですね、そこで違ってくる。1897年、あるいはそれ以降と前とは作風が違うのだなということが、今日聞いていて分かりました。で、ムテジウスの専売特許案は（1887年頃）、セセッションとか、そういう範囲に入る建物ではなくて、むしろ、ルネサンス的な歴史主義様式だということになります。

それから、ハインリヒ・メンツ、この人はベックマンと一緒に来た人でありまして、この人物についても何にも分かってないのです。ドイツのことでようやく一つ分かったのは、1861年に生まれているという

図24 ギーゼンベルク署名入りの図面（司法省）（神戸市役所所蔵）

図25 ギーゼンベルクの署名（神戸市役所所蔵）



図26 ムテジウス署名入りの図面（司法省）（神戸市役所所蔵）



図27 ムテジウスの署名（神戸市役所所蔵）

ことです。で、この帝国ホテルの図面はちょっと線が消えかけていますが（図28）、かろうじてメンツのサインがあり、1886年12月東京と書いてあります。やはりネオ・ルネサンス様式です。

煉瓦製造

次に、ドイツからの影響を受けたということでは、煉瓦製造において一つ大きな功績があります。ベックマンは日記の中で、日本については、まだまだ煉瓦の製造工程や質は良くないというふうなことを書き、彼が滞在中に新しい煉瓦製造工場を建てることを政府に提言します。それで、政府も早く動きまして、明治20年（1887）、埼玉県の深谷市、当時は、上敷免村と呼んでいましたけれども、そこをはじめとして、栃木県でもそうですけれども、ホフマン輪窯というものを建てていく。

その後、全国に建ちまして、50基以上のホフマン窯が活動します。その端緒をつけたのは、ベックマンの提言からだと言われています。今4基ぐらい残っているということです。そのうちの一基が深谷市にあります。それは、輪のような状態で一周させまして、煉瓦をそれぞれの房と呼ぶところに積み上げる。で、仕切りを仮設に建てて、一つの房を燃焼させる。上の方から、

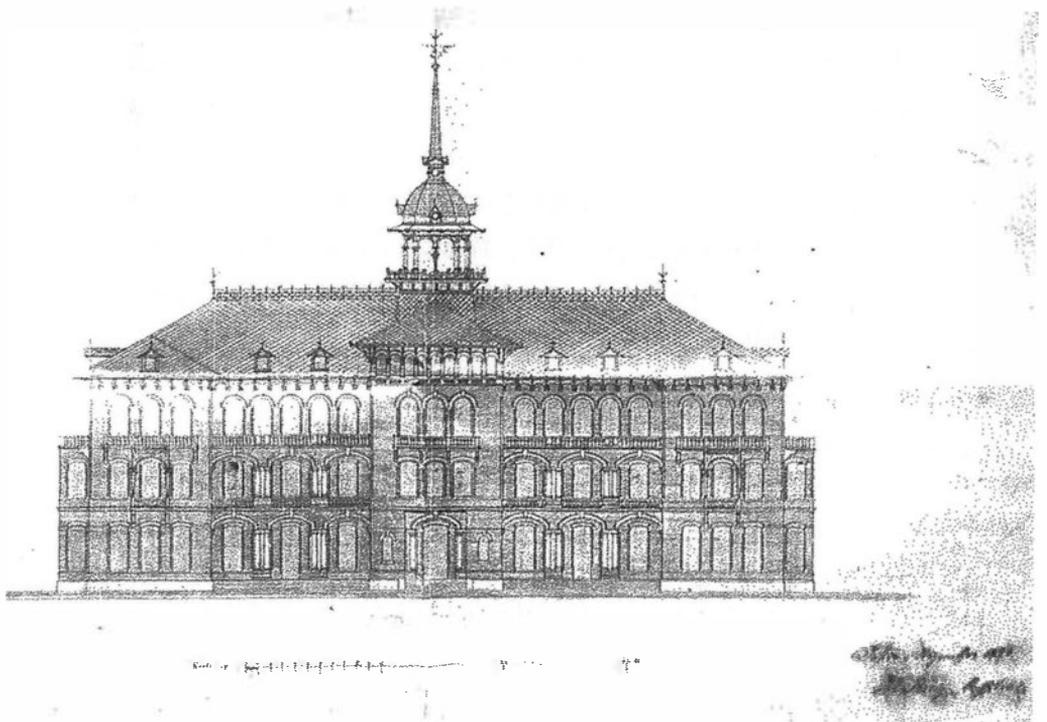


図28 メンツ設計：帝国ホテル案（1886）（日本建築学会図書館所蔵）

石炭の粉を入れながら、その火力を増す。そして、どんどん、どんどんと、それを隣の房に移して行って一端つけた火種を絶やさずにする。それで、かなり向こうに火が行った時には、すでに焼き上がった煉瓦を取り出して、また新しい煉瓦を入れて、次一周してくるまで火を待っているというふうに、一度火をつけたものを、ずっと燃やし続けて製造する。つまりそういうふうな連続の製造を可能にしました。

結局ここで働く人達は、3交代制でやっていたから、大変だったでしょうけれども、煉瓦の製造の生産量を上げること、それから、いままで手抜きでやっていた煉瓦を、機械、つまりピアノ線なんかで切るといふふうに、機械工程に変えていくっていうことを、この時にしました。だから、それ以前と以後ではですね、まあ、煉瓦っていうものも、基本的が変わってくる。そのきっかけをベックマンがつくった、これは、まあ非常に大きな功績です。

ドイツ積み

煉瓦にはご存知のようにフランス積み、イギリス積みっていうのがありまして、あと、イギリス積みをちょっと変形したオランダ積み、それからアメリカ積みとか、さらに小口積み、これ、別名、日本ではドイツ積みと呼んでいます。つまり、煉瓦の小口面だけを見せて仕上げる。で、このドイツ積みも、彼らが建てた建物がやっぱり規模が大きかっただけに、宣伝力もありました。後に辰野金吾なんか小口積みが多いですね、東京駅を代表として。

だから、そういう意味でも、フランス積み、イギリス積み、そして、ドイツ積みと日本で呼ばれる小口積みですけども、煉瓦造の中ではきちんと一角を占めるような、そういう建物をエンデ&ベックマンは残していくっていうことになりました。

なお、小口積みっていうのは、これ一枚はずしてしまえば、中はイギリス積みで造っていたりします。したがって、化粧煉瓦というような、特別に焼いたものですね、そういうのを最終的に仕上げに使っていくっていう意味で、これまで構造と意匠が一緒であった煉瓦積みに対して、また違う見せ方、作り方っていうことを提案したことになります。

法務省旧本館の復原

その法務省の建物の復原改修工事を、平成3年（1991）から行いました（図29）。写真の上が復原前のもので、第二次大戦で、屋根、そして床が焼け落ちたのですね。改修工事をしてこの状態で使っていましたけれども、ついに雨漏りもするようになってきたのでいっきに復原しようとして、で、元に戻したのが下の姿です。今東京駅も、現在の状態から創建時のものに変えようとしております。

まあ、法務省の復原が本当にこれで良かったのかということは、常にこういう歴史的な建物

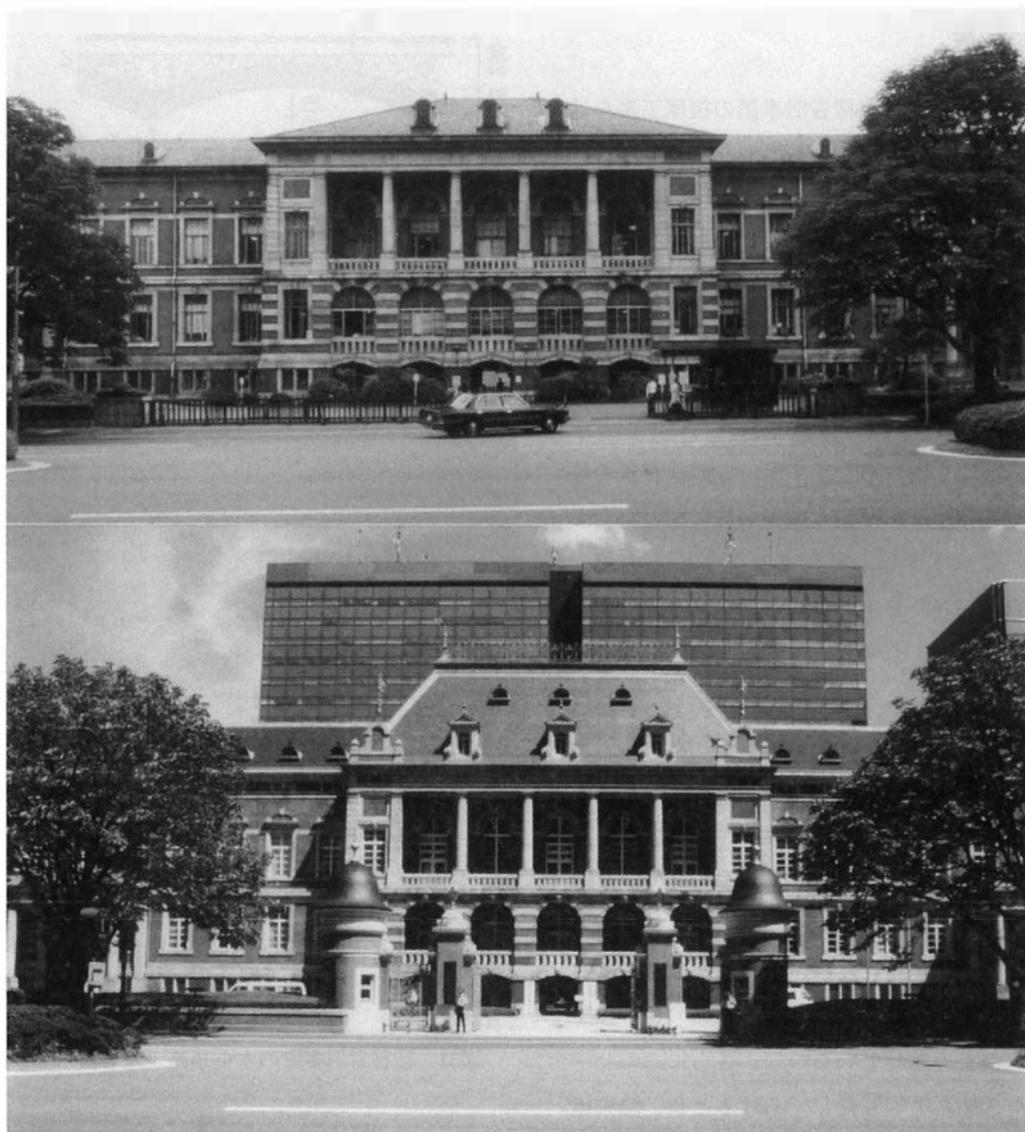


図29 上：改修前の法務省旧本館，下：復原改修後（筆者撮影）

の復原ということにはついてまわりますが、このときは、もう、いけいけどんどん、復原ありきで何十億も税金を使って元に戻しました。で、中も復原しております。ここは隣に地裁があり、向かいに警視庁がありますから、随分いかめしいですね。門番もいます。しかしここは訪問できますから、一度、警視庁あたりに、警視庁に行かなくてもいいですけども、あの界限に行ったときはどうぞお寄り下さい。無料です。

防火床

それから、法務省旧本館の復原工事を通じていろいろなことがわかりまして、これはヴォールト煉瓦床と名付けています(図30)。ここは旧本館の中央通路ですが(図31)、こういうところの天井面を煉瓦で造っていく。これはある種の防火床で、法務省旧本館に積極的に採用されました。この防火床としてのヴォールト煉瓦床は、旧本館以前にも例はありますが、この法務省の建物において、はじめて本格的に使われたという意味では、嚆矢としてよいものだと思っております。で、その一部が中央通路に入ると、そのまま生の形で残しております。

ここではレールを梁にして、煉瓦をアーチ状に組み合わせています。非常に緩やかなアーチで、こういうのをプロイセン式ヴォールト天井というふうに言っています。同時代のドイツで結構普通に見られる防火床です。ただね、防火床としてちょっと難点があります。ここでは鉄のレールをそのまま見せているので、さらにこのレールを煉瓦等で被覆してあげるとね、防火床としては完璧なものになります。こういうのも、まだ同時代のドイツに見られた構法です。この種の構法は結構長い間、鉄筋コンクリートに取り変わるまでは、防火床として使われ続けます。

碇鉄構法

これは碇鉄(ていれん)鉄構法と呼びます(図32)。煉瓦壁を積上げていく途中で、煉瓦壁に平べったい帯鉄(おびてつ)を入れます。煉瓦壁のコーナーや壁が交わるころには丸鋼(まるこう)と言って丸い断面をもつ鉄を縦に差し込みます。そしてまた煉瓦を積んでいく。これ

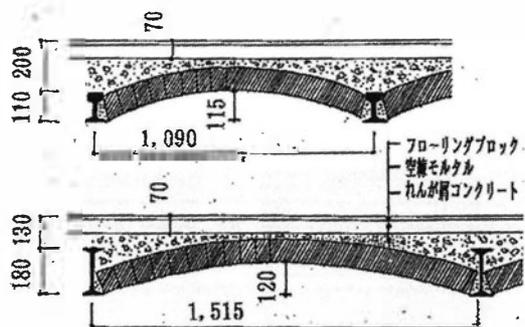


図30 ヴォールト煉瓦床:法務省旧本館(筆者作図)



図31 法務省旧本館の中央通路(筆者撮影)

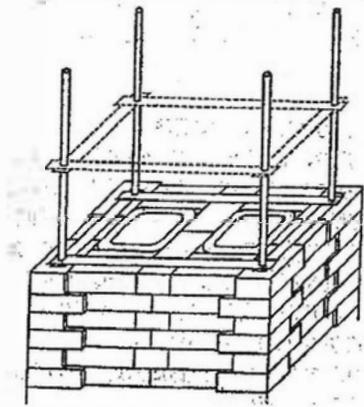


図32 碇聯（ていれん）鉄構法（The Japan Weekly Mail, June 30, 1894）

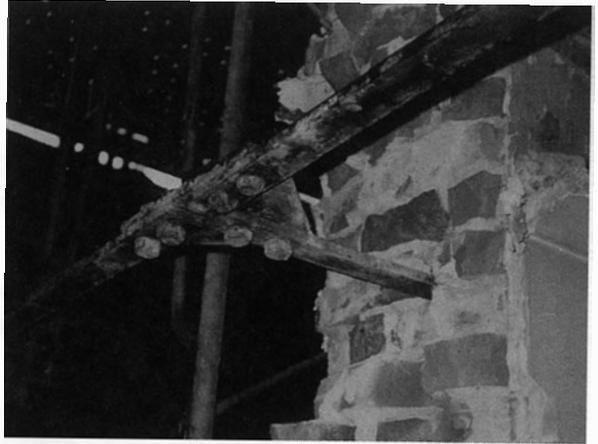


図33 法務省旧本館工事中の帯鉄（株式会社大成建設提供）

を階毎に入れることによって、耐震ですね、耐震構法となります。これは、ジュール・レスカスやジョサイア・コンドルあたりが始めたらしいですけれども、まあ、本格的に採用したかどうかはきちんと分かるのは、この法務省の建物であり、同じ時期に建てられた東京裁判所だったようです。

これは実際の工事中の写真ですが、帯鉄が入っていました（図33）。ここでは丸鋼が抜けていますけれども、40～50センチの長さの丸鋼が入っていました。これが、外回りと主要な間仕切りに全て入っていました。このおかげで、大震災にも耐えるということにもなりました。実は大震災で、煉瓦ってというのは弱いってという評価が下されましたけれども、それは、こういったしっかりした構法をもっていないか、煉瓦目地にモルタルをかなり石灰分の多いもので使っていた煉瓦造については、確かに弱いのですけれども、目地のセメントの比率を高くし、碇聯鉄構法を使っていた建物はですね、大丈夫だった。

ドイツ小屋

さて、今度は屋根についてです。ドイツ小屋、これははじめて聞く人がいるかもしれませんが。現在の建築の世界では、全く死語です。しかし、明治から大正時代にはこの呼び方がされていまして、私はこの死語をここ数年復活させようと考えていまして、どうぞ、今日お聞きになっている人はね、ドイツ小屋を覚えてください。実は、さっき坂本先生がトーマス邸の話しのときにその小屋組が和小屋風と言っていましたけど、あれ、ドイツ小屋なのですね。

その特徴はね、母屋組ということです（図34）。母屋を束で受けたり、あるいは斜柱で支えたりしています。斜柱（しゃちゅう）というのは当時の言葉ですけれども。それで、ここに、

垂木なり合掌なりが乗っていく。で、この斜柱と合掌を、控え梁（ひかえばり）と当時呼んでいましたけれども、これは合せ梁でありまして、両方から扶むようなかたちで固定する。ボルト締めで固定します。この控え梁の上の水平部材を帯梁（おびばり）と呼び、両合掌を全体にAの字になるように挟み込んでボルト締めする。こういう特徴を持っていれば、ドイツ小屋ということになります。

ドイツ小屋ってってドイツで流布していたかという、これは、ドイツというよりもヨーロッパの中での在来構法の一つです。だから、ドイツで典型的というわけではありません。結果的には、結構多くの建物の屋根がこの構法でつくられていましたので、まあ、日本ではこれをドイツ小屋とか言って他と区別していました。

これは、研究室で作ったドイツ小屋の模型です（図35）。中央に真東があり、斜めの方杖があって、一見トラスに似ていますが、実は、大事なのは、母屋を束でしっかり支えてその上に垂木なり合掌なりが乗るってことです。で、次の模型が普通のキングポストトラスです（図36）。陸梁に合掌が乗り、三角形状になっている。その上に母屋が乗っている。ドイツ小屋とは逆なのです。で、調べていくと、日本に来たドイツ人や、ドイツで勉強してきた日本人にこの形式がやっぱり多いのです。

だから、そういう意味では、今までの洋小屋であるキングポストトラス、クイーンポスト、それからシザーストラスとかいうものもありますけれども、それらにドイツ小屋というものをひとつ付け加えてですね、我々は、もう一度母屋組をみる必要があると思います。このドイツ小屋も、エンデ&バックマンの作品から始まるわけですから、用語や技法の中でも影響を与えているということになります。

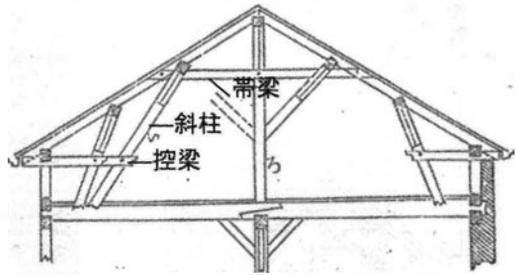


図34 ドイツ小屋（滝大吉：建築学講義録 巻の2，建築書院，1896）

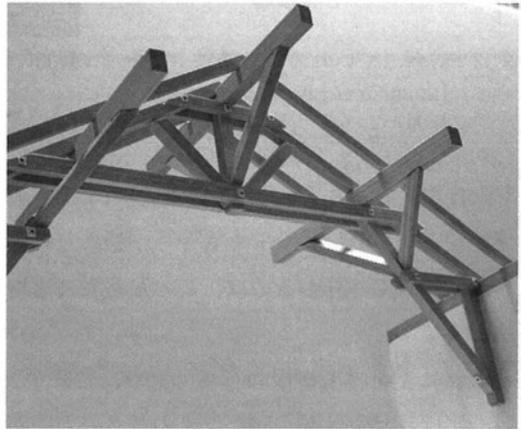


図35 ドイツ小屋の模型（昭和女子大学堀内正昭研究室所蔵）

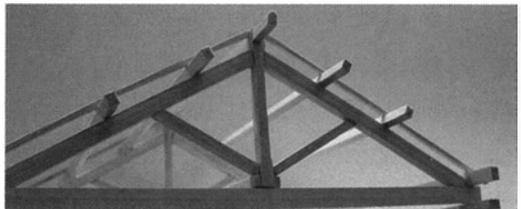


図36 キングポストトラス（昭和女子大学堀内正昭研究室所蔵）

ドイツ小屋の事例

これは、法務省旧本館の小屋組で（図37）、先程申し上げたゼールの署名がある図面の部分です。やはり同じようにドイツ小屋の手法で、この大きな小屋組を造っています。繰り返しますが、母屋を斜柱で支える。それで、主要なところを合せ梁で挟んでいくという構法です。次の建物は、これは5、6年前に解体されてしまいましたけれども、日本酸素の工場、後に記念館になりました（図38）。その設計者のことが分からなかったのですけれども、一説ではもしかしたら妻木頼黄かもしれないといわれておりました。

私は、この建物が解体される事を聞きつけまして、ほとんど一人で実測しました。日本酸素にしてみれば、長らく記念館として保存していて残念だったでしょうが、実は、経済的理由で取り壊されました。今はここにマンションが立っています。この建物は面白いですね、煉瓦と木で出来ています。これは、ハーフティンバーの貴重な例にもなります。それから室内にはドイツ小屋が使われています。

これは幸い最近復原改修されました青木周蔵邸です（図39）。ドイツ派の有力な政治家でしたけれども、彼が那須に構えた別邸です。で、この小屋組ですが、これもドイツ小屋なのですね（図40）。設計者は、ベックマンが来日したときにずっと付き添っていた松ヶ崎萬長です。まあ、彼もドイツ派というものを日本に結局残していくことになりますけれども、これ小屋組を見ると確かにそういう伝統をきちんと受け継いでいるなと思います。

でね、この小屋組は どうも 通常は見せてくれ

図37 法務省旧本館の中央棟小屋組（神戸市役所所蔵）



図38 日本酸素記念館（竣工1911）（筆者撮影）



図39 松ヶ崎萬長：旧青木周蔵那須別邸（1887～88）（筆者撮影）



図40 旧青木周蔵那須別邸中央棟小屋組（筆者撮影）



図41 改修工事中のクラーク記念館（1892～93）（筆者撮影）

ないらしいのです。この別邸の復原工事は岡田義治先生がやられましたので、事前に岡田先生に連絡するか、そのときにね、岡田先生の名前を出すとよいかもしれません。それから次の建物は、京都で現在復原中の同志社クラーク記念館です。これはゼールが遺した今や重要文化財です。私はデザインよりも、小屋組に関心がありまして、工事中の小屋にはいろいろ鉄骨も入っていますが、基本的には母屋の位置とそれを受ける束がどうであるのか、それから合せ梁がどうなのかと見ていくと、これもドイツ小屋ということになります（図41）。

国会議事堂

さて、最近興味をもっているのが国会議事堂で、調べ直しています。最初はケーラーが設計し、彼が病弱だったので、その後アドルフ・シュテークミュラーという所員が代理でやってきます。そして、国会仮議事堂として明治23年（1890）に第1回帝国議会に間に合わせるべく、突貫工事で竣工しました。しかし、2ヶ月で焼けてしまいまして、外観写真はこれ1枚きりなのです（図42）。議事堂内の写真は1、2枚遺っていますけれど、よく分かっていない建物の一つです。

私はこれを随分昔に見た時に、変なプロポーション持っているなあと思ったのですね。つまりここには議事堂らしい、塔やドームがないのです。同じ事務所の人が、木造とはいえですね、やっぱりこういうへんてこな設計したのは、何か訳があるのかなあとしばらく考えていたのですね。

実はこれ平成16年（2004）、2年前ですけれども、朝日新聞で幻の設計図があったと、大変大きな見出しで掲載していただいたのですが（図43）、神田のある古書店がこの図面を見つけてきたのですね。あんまりね、古書店ってどこから出てきたと言わないみたいですね。それは、何か出した人のプライバシーがあるらしくて。この図面が出てきたとき、鑑定してくれといわれました。

鑑定といわれましても、建築の図面に偽物なんてないのですが、この図面はいつの時代のど

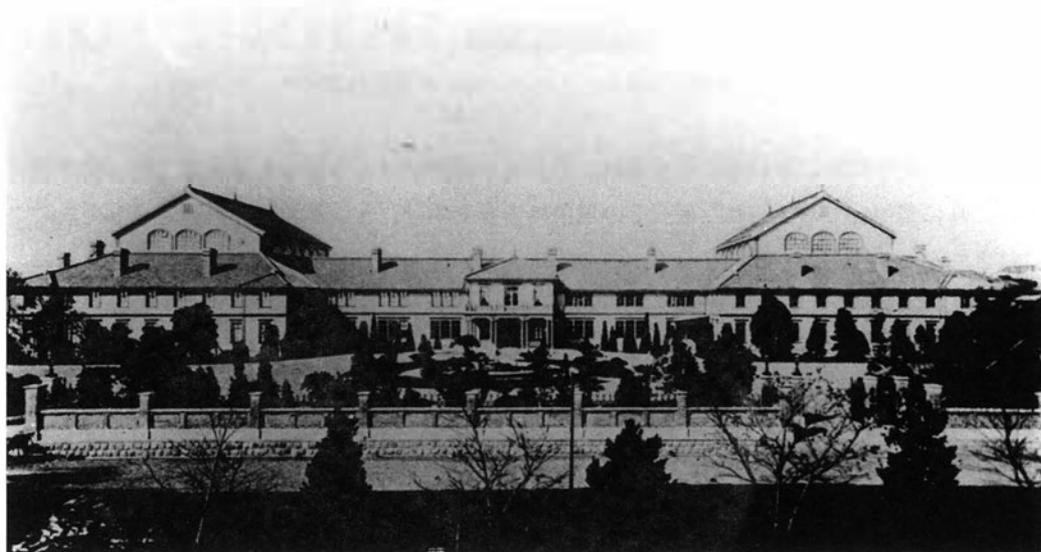


図42 初代国会仮議事堂（1888～90）（日本建築学会図書館所蔵）

図43 仮議事堂平面図発見のニュース（朝日新聞夕刊2004年6月12日付）

の段階の図面なのか、ということですね。それを一週間かけてちょっと考えました。結果的には、これに基づいて着工されたと。その理由は省きますけれど。私の方で鑑定しました。ここにはきちんと寸法も入って入っていて、この寸法入りの図面はこれが初めてです。いままでは、図面の下のほうにちょっと縮尺が載っていただけで、まあ不完全な図面だったのですね。これは木造で、だいたい間口100メートルぐらいです。ケーラーの原案では180メートルぐらいですね。もちろんそのときは煉瓦造だったけれども。しかし、木造になっても同じなのです。雰囲気といいますか、間取りが。だから一見外観が違っても、間取りはしっかりとシュテークミュラーが引き継いでやっています。建物の中央に八角形状のホール、それからいろんな部屋の並べ方も全部同じです。両翼のこのあたりの凹凸もよく真似ていますね。

議会配置については、原案（図44）を見るとちょっと小さいですけども扇形に座席があっ

PARLAMENTSHAUS FÜR JAPAN · KOKUKUWAI GIJIN · HOUSE OF PARLIAMENT FOR JAPAN

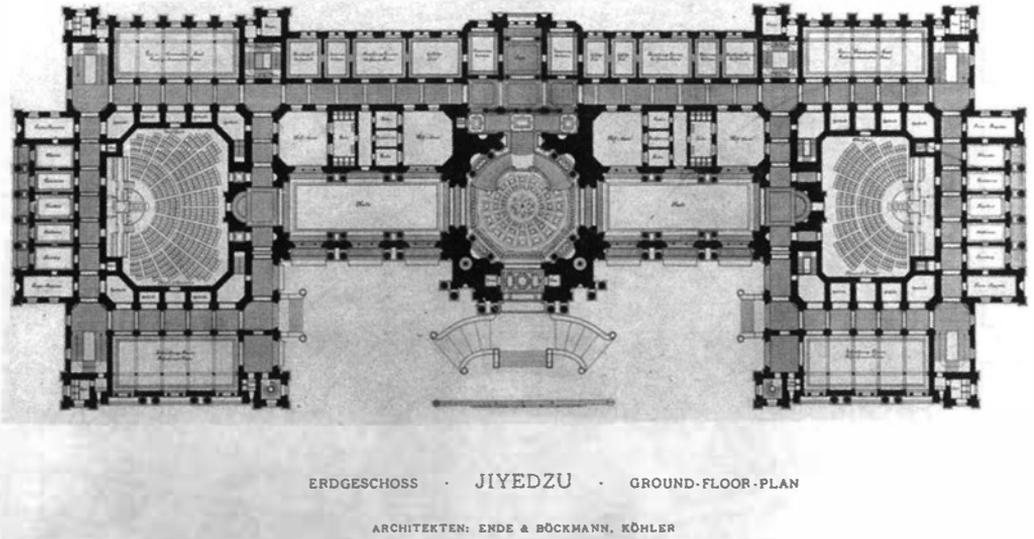


図44 国会議事堂原案1階平面図 (Technische Universität Berlin, Universitätsbibliothek, Plansammlung)

て、これは今でも一緒ですね。それから速記者席があって、演説者の席があって、議長席があって、これは今でも一緒ですけども、実はこのような座席配置は、ドイツからの影響ということで、これも今年の夏にいろいろ調べてみました。

今のベルリンの国会議事堂は1894年に竣工していますから、ドイツ人もあの建物が建つまでは仮議事堂で議会を開いていました。その時の間取りがこの図です (図45)。扇形の座席、速記者席、両側の階段、ここに演台があり、続いて議長席、そして大臣席などが並んでいます。これがそのまま日本にも採用され、未だに継承されていますから、エンデ&ベックマンは国会議事堂に一つのプロトタイプを植えつけて、そのまま影響を与え続けているということになります。

次の図面が1階 (図46)、そして2階 (図47)。当初ここには八角形の塔が建つ予定だったのですね。この議事堂に関する記事が東京朝日新聞の明治22年 (1889) 1月3日付で掲載されていました。それはちょうど着工されてから半年くらいに出た新聞です。ここに掲載された図面は、発見されたものの略図で、同じです。こういう姿でもってとにかくエンデ&ベックマン建築事務所では仮議事堂の案を立てていたということが分かりました。ですからここはしっかりと塔があったのですね (図48)。

結果的には国会の開設に間に合わせるという時間の制約があったのでしょうか、この塔まで手が回らなかったことが一つ、それから財政的な問題があったからかもしれません。また、当

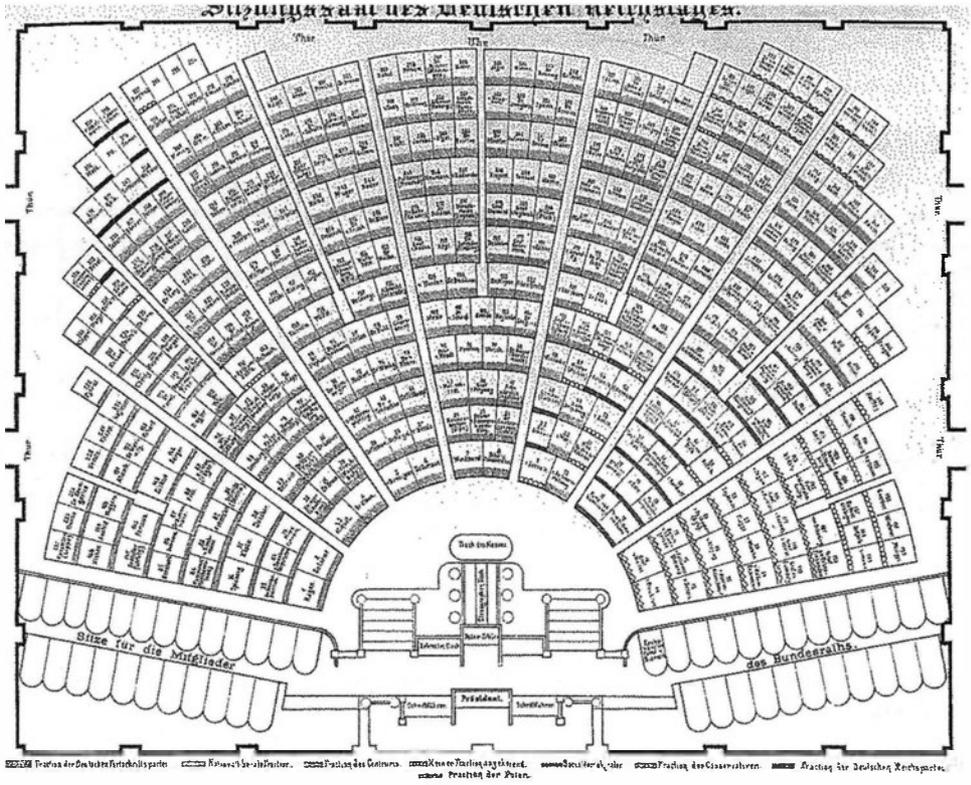


図45 ドイツ国会仮議事堂 (1871) の議会配置 (Cullen, M.S., Der Reichstag, be.bra verlag, Berlin, 1999)

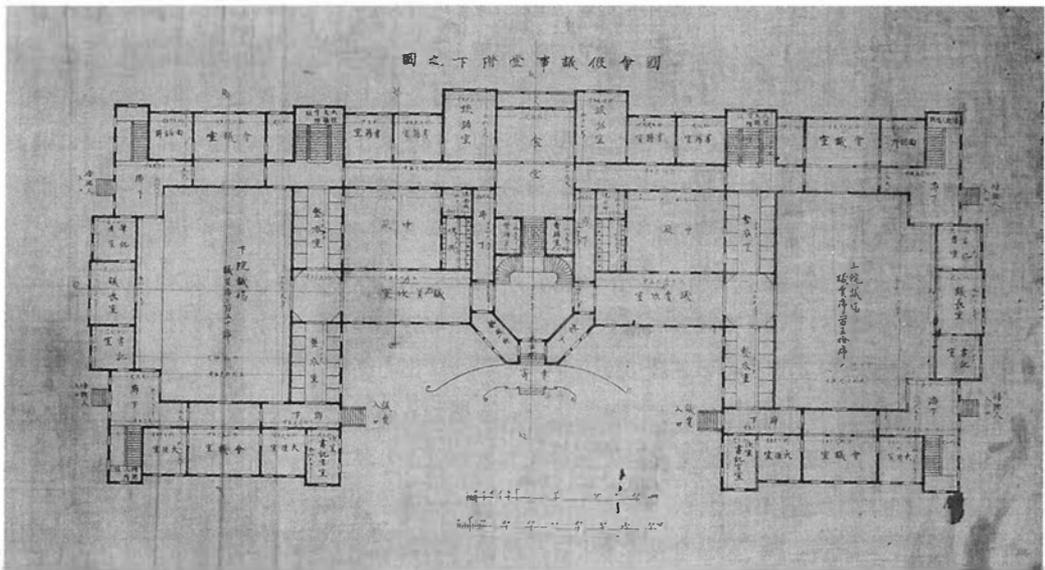


図46 初代国会仮議事堂案1階平面図 (昭和女子大学図書館所蔵)

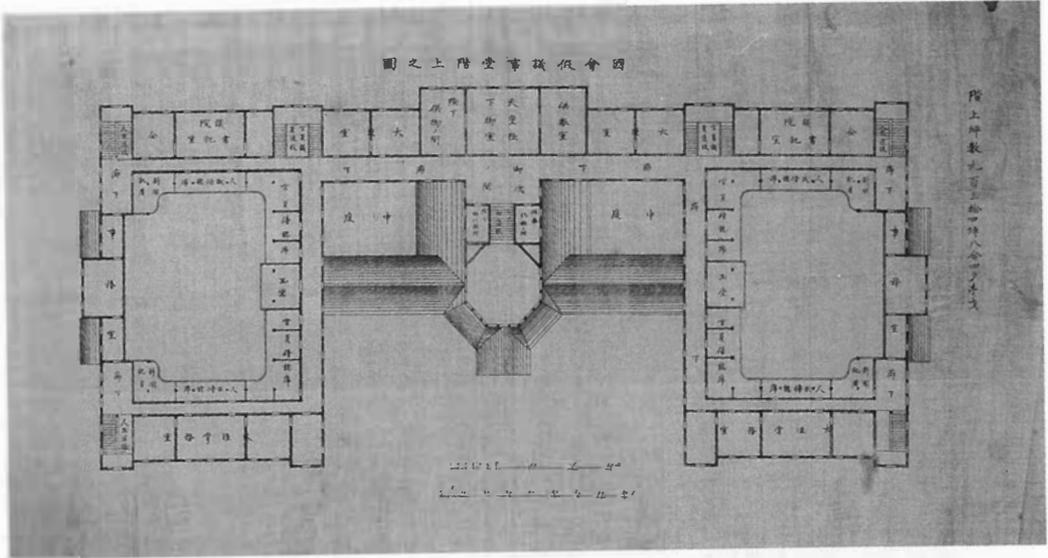


図47 初代国会仮議事堂案2階平面図（昭和女子大学図書館所蔵）

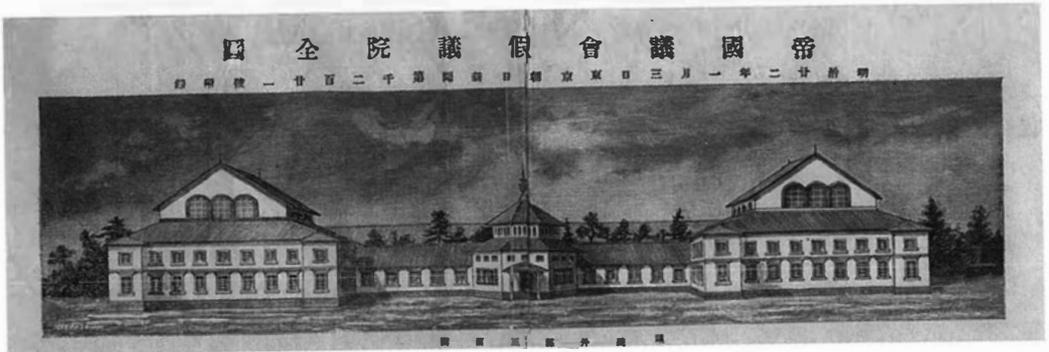


図48 初代国会仮議事堂案の外観（昭和女子大学堀内正昭研究室所蔵）

初平屋であったところが、2階建てになっていたりします。従って、結局工事中に設計変更しながら仕上げられたこととなります。結構大変なプロセスを経ていたこととなります。この八角形のホールの前に棟が増築され、今更ここを強調する必要がなくなってしまったのですね。

この仮議事堂の図面で流布しているのが、日本建築学会の『建築雑誌』に掲載された平面図です。その図面には、後の増築部分を含んでいないことがわかりました。こちらの図面は、憲政記念館に遺されているもので（図49）、その裏側に明治23年（1890）7月の総選挙で最初に当選した議員達の名前が載っています。確実にこちらの図面の方が後になりますから、ほぼこの通りに建てられたと思います。これが今の国会議事堂で、全体計画の細部はもちろん違ってしまうでしょうけれど、大まかなところは全く同じです。

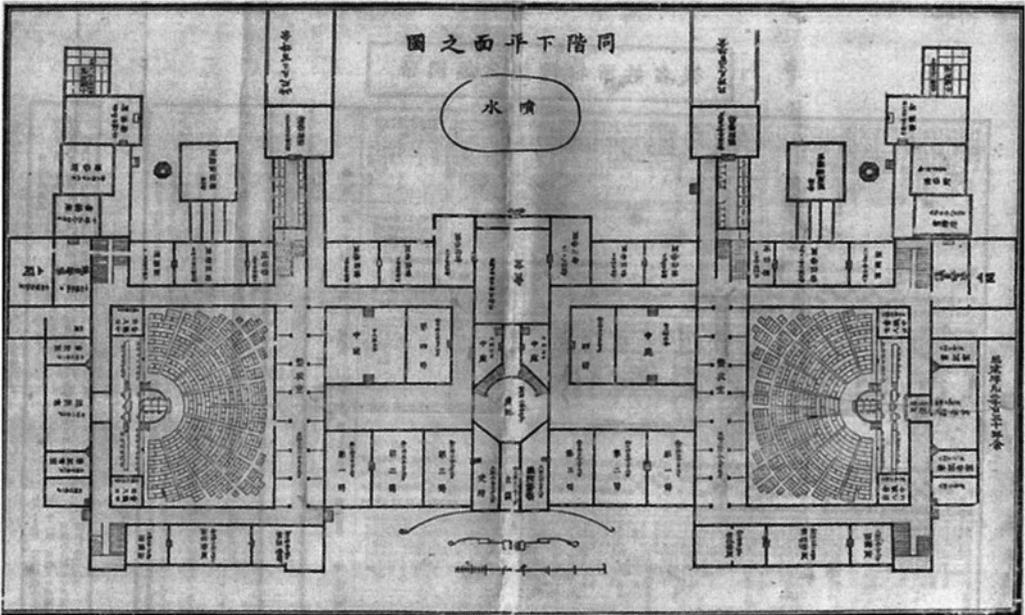


図49 初代国会仮議事堂1階平面図（衆議院憲政記念館所蔵）

仮議事堂の復原模型

今年、私どもの研究室で国会議事堂の議場を復原するというのをやりました。50分の1でけっこう大きいですよ（図50）。これは貴族院側の方だけですけれども、横幅で60センチくらいになりました。外壁はドイツ下見。それからよく分かっていない小屋組については、ドイツ側で作ったのだらうということ念頭におきまして、いろいろ遺されている写真の一部とか錦絵などの絵画資料を見ながら、推定して復原しました。

小屋組にはタイ・バー（鉄の棒）が水平に入っていて、木造と鉄との混合の構造体なのです。面白い構法ですね。そうしたことも分かってきました。実はこの仮議事堂の「仮」という文字に意味がありまして、結局十年くらいもたせるつもりで建てているのですね。その間に本格的な建築を建てればよいという考え方です。こういった木造にタイ・バーを挟んだような建築。こういうのは駅舎なんかによく見られそうですけれども、実はドイツでは祝典会場のように一時期のみ使用する仮設建築に、1880年代～1890年代によくこの構法を使っていました。しかし、規模が大きいですから、そこに鉄の構法を補強として入れる、まさに仮設ですね。仮議事堂の工事を実際に担当したのはシュテークミュラーで、同時代にあったドイツの構法をそのまま持ち込んできたのだということが最近分かってきました。

この模型は本当に一生懸命に作りましてね、今年ほとんど夏休みなかったのですけど。なかなかいいでしょ（図51）。しばらく研究室に置きますので、昭和女子大学にいらっしゃった時

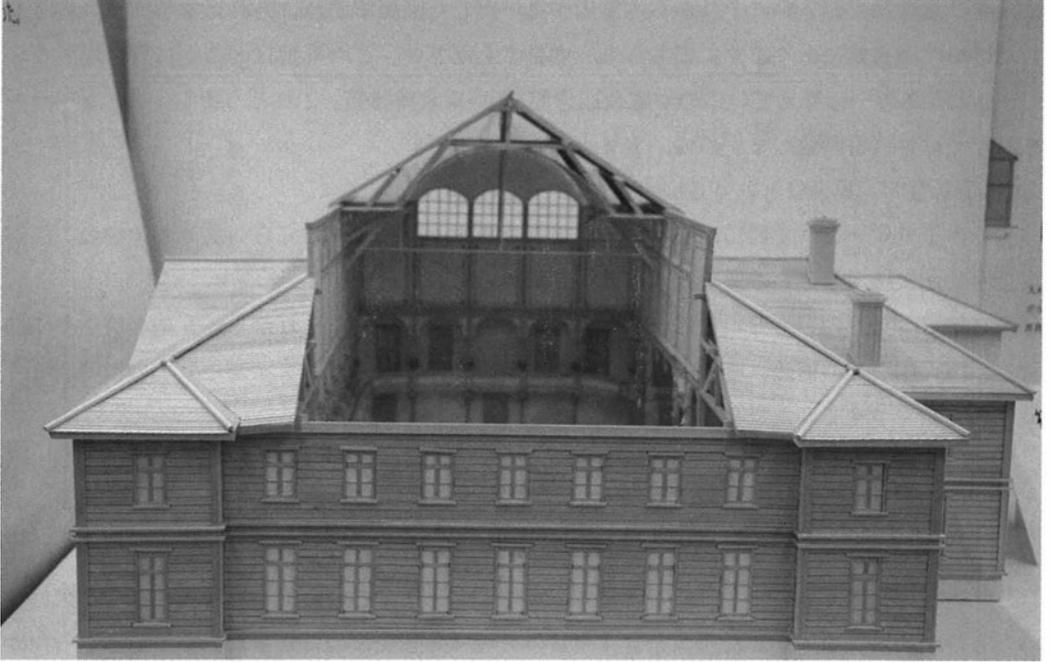


図50 初代国会仮議事堂復元模型（50分の1）製作：堀内研究室（昭和女子大学堀内正昭研究室所蔵）

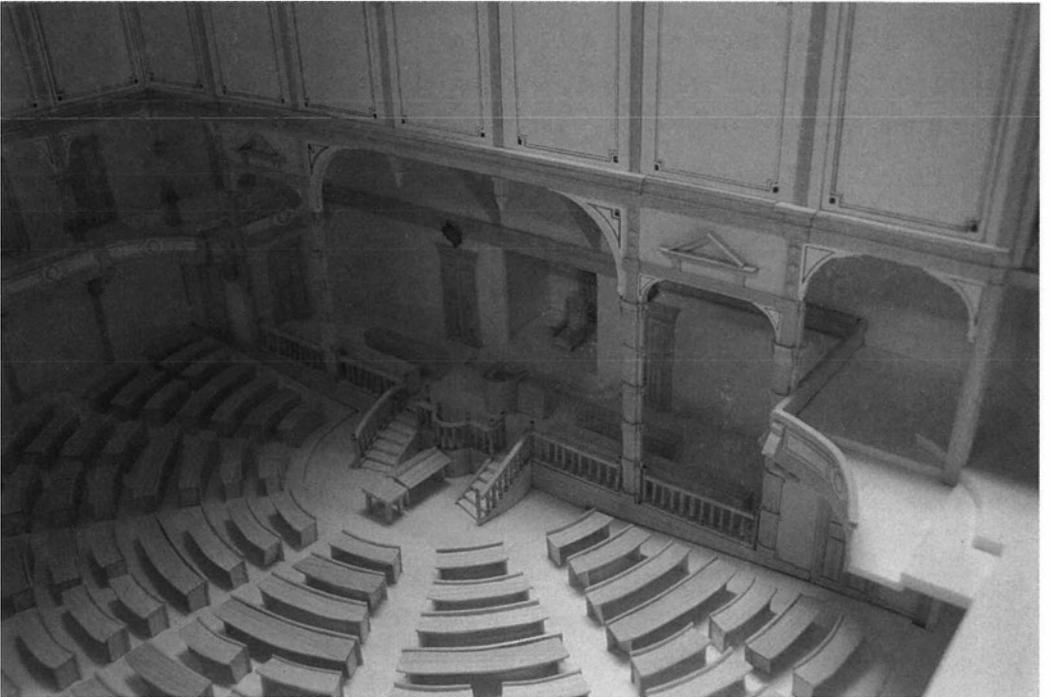


図51 初代国会仮議事堂復元模型（貴族院議場）（昭和女子大学堀内正昭研究室所蔵）

にはぜひお訪ねください。それから古書店が見いだした図面ですね、あれは本学で買い取りましたので、図書館にあります。こちらも一度見てください。この模型はどこかに行き場所ないですかね。あの一応考えているのが憲政記念館、江戸東京博物館。これどうでしょう。コーナーをいただければ寄贈致しますので、ちょっとお考え下さい。

(会場から質問：規模はどれくらいですか。)

50分の1です。これで間口は60センチ以上あります。高さも同じくらいありますか。江戸東京博物館に展示している鹿鳴館、あれより大きいでしょうか。

本日は、ドイツの影響ということについて、歴史主義の様式、それから煉瓦造の製造や小口積み、防火床などの構法、そしてドイツ小屋、さらに建物のプロトタイプとしての影響。こういうのを紹介させていただきました。

ドイツへの日本の影響

ちょっと後5分くらいいただいてですね、実はこのテーマをいただいた時にね、一つ欠けているものがありました。つまり4つ目のテーマが必要なのですよね。どういうテーマかといいますと、ドイツに与えた日本建築の影響ということなのです。あと、少々時間いただいてちょっと紹介しておきます。

これは国会議事堂の第2案で(図52)、和洋折衷の奇妙な案が作られました。これもエンデ&ベックマン建築事務所のケーラーがベルリンで仕上げています。実際奇妙なので人気なかったのですけども。ここには、天守閣を始めとする日本建築のモニュメンタルな表現ですね、千鳥破風や幾層も重なるような屋根ですね、そういうのが応用されています。なお、これは名古屋城で(図53)、ベックマンが滞在中に収集した記念写真です。

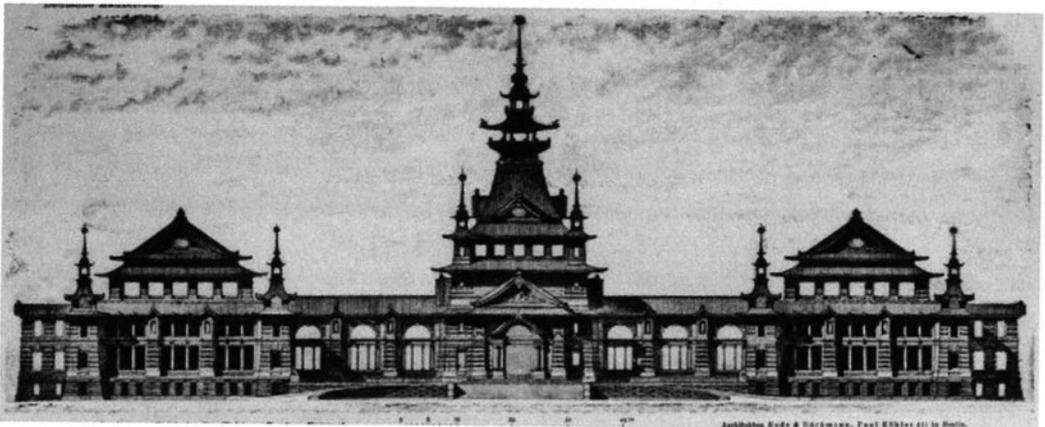


図52 国会議事堂の和洋折衷案 (Deutsche Bauzeitung, 1891)

それから、ベックマンと関係あるベルリン動物園で1898年に入場門・管理棟のコンペが行われました。これがツァール&ファールによる一等案です（図54）。これを見るとジャポニスム

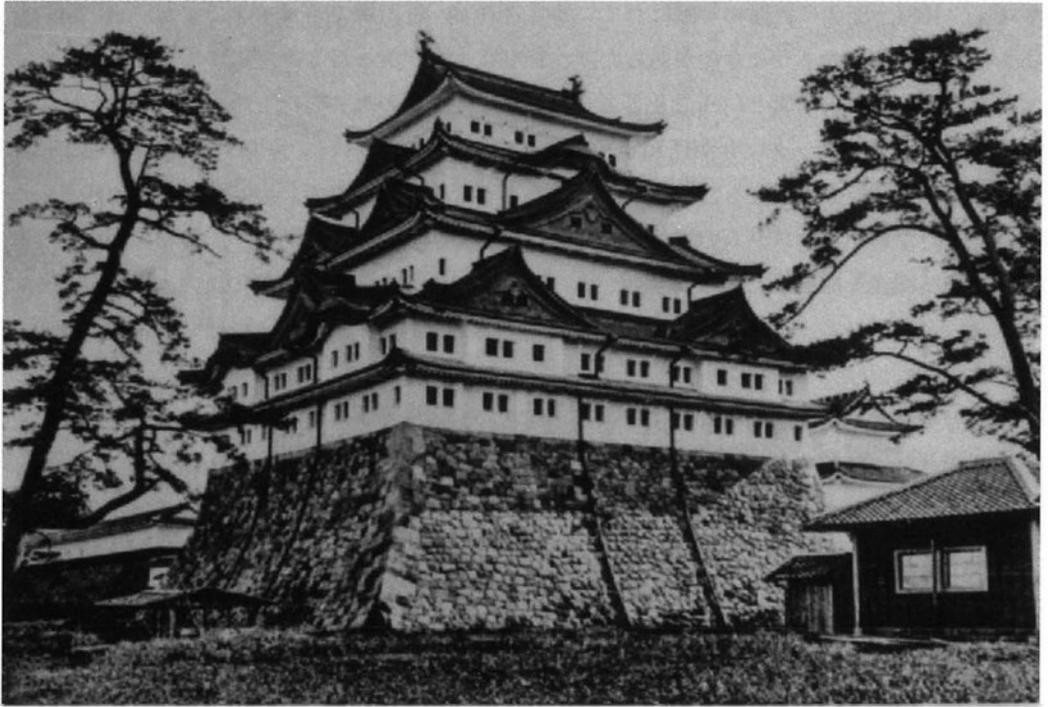


図53 名古屋城（Böckmann, W., Reise nach Japan, 1886（東京大学藤森照信研究所蔵））

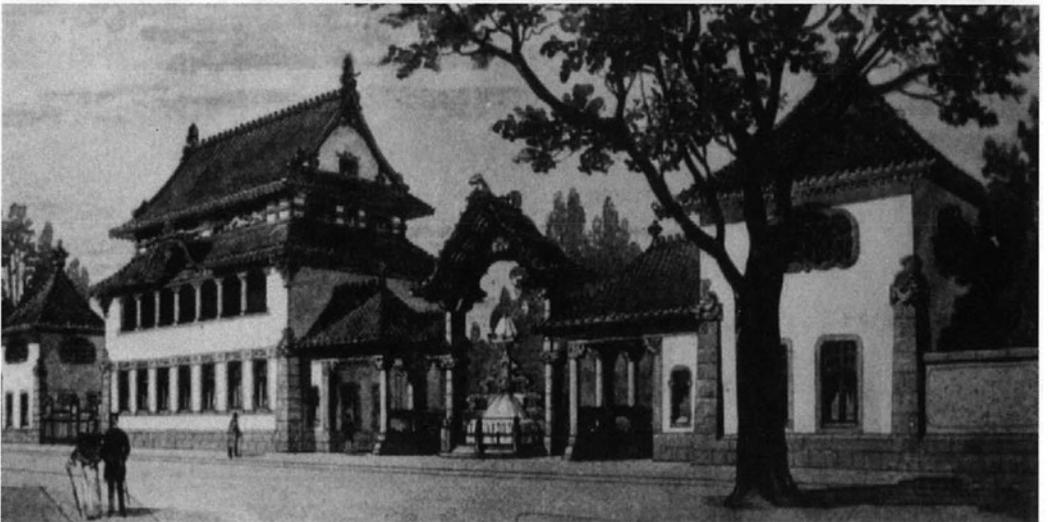


図54 ベルリン動物園入場門・管理棟競技設計1等 ツァール&ファール案（1898）（Berliner Architekturwelt, 1899）

の一環だろうと思っちゃうのですね。でもそうじゃなくて、なぜそうじゃないかと言うと、この応募案全部見ましたけれど、日本風なのは1件しかなかったのですね。それ以外はドイツ・ルネサンスのリバイバルだとか、歴史主義様式で作っていました。今この入場門は象門（1899年竣工、1984～85年に再建）と呼ばれていますけれど、唐門風のデザインですね。横に建つ建物も禅宗の火頭窓のようなものがあったり、軒下に木組があったり、屋根に反りがあります。当時日本風、まあ中国風ということもありますが、そう思われていたものです。

これはエンデ&ベックマンが1870年代に設計したアンティロープ舎です（図55）。ちょっと難しい動物の種ですが、要はレイヨウのような種の動物舎で、当時北アフリカ辺りから連れてきたためか、イスラムの様式を使っています。歴史主義の一環です。動物の種から連想される建築様式を採用するという態度があったわけです。また、1897年にこの入場門の近くにカイザー&グロスハイムによって禽舎が建てられます（図56）。ここに写っているのは丹頂なのですね。丹頂は、学名でゲルス・ヤボネシスというくらい、日本の象徴なのですね。実はこれ上野動物園の人にも見てもらって、丹頂鶴とのお墨付きをもらっています。その禽舎に和風が採用されている。

実はもっと面白いことがあって、この禽舎の中に仏像があるのですね。この仏像はベックマンが日本で購入したもので、ここに寄贈してあるのです。そうしますとこの一郭は、「日本」という雰囲気醸し出されていて、その一年後にさっきの入場門のコンペがありました。そう

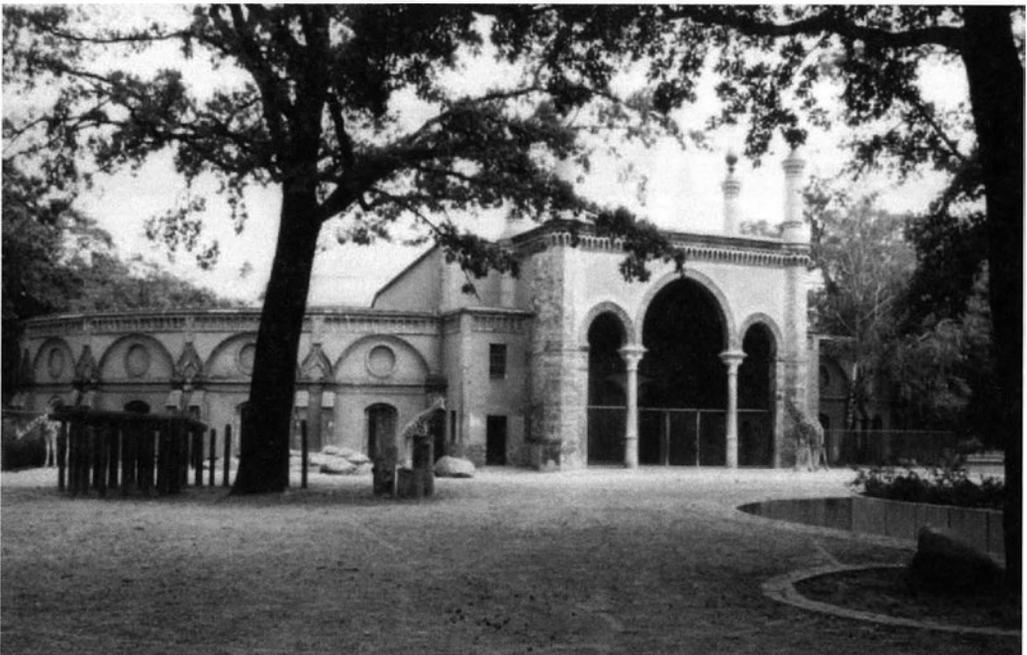


図55 ベルリン動物園アンティロープ舎（1871～72）（筆者撮影）

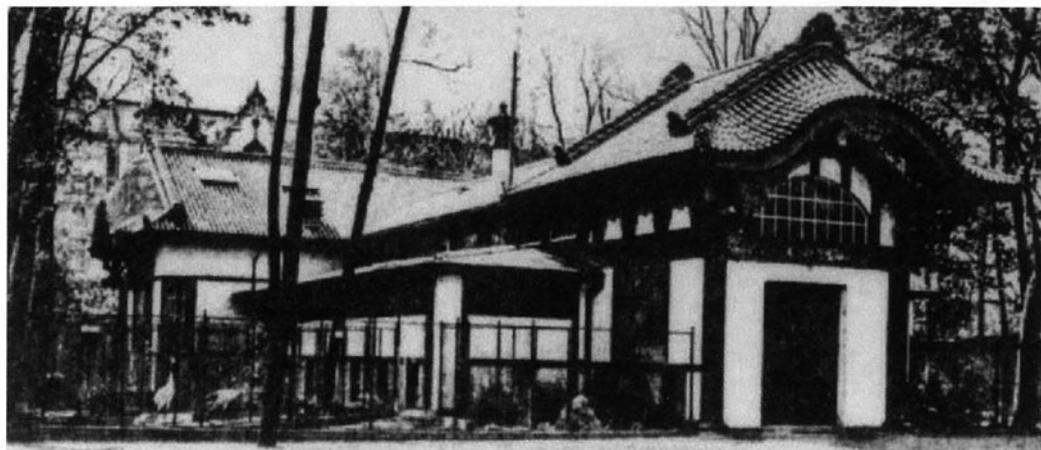


図56 ベルリン動物園の禽舎（1896～97）（左下に丹頂鶴が見える）（Deutsche Bauzeitung, 1902）

しますと当然、日本を意識するというか、バックマンはその時動物園の会長をやっていました。それから、コンベの審査員もやっていましたので、数が少なくてもその案が即採用になってしまうのですね。それが今も遺っている。

エンデとバックマンというのは日本にも影響を与えたけれども、日本からも影響を受けて、ごく一部ですけどもね、その影響をベルリンの一郭に遺し続けています。そういうことで、これは私の課題外のことですけれども、これで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

司会：堀内先生ありがとうございました。全体テーマを補っていただいたお話もいただき、本当にありがとうございました。質問の時間を少しいただいているのですけれども、どなたか質問おありでしたらお受け致したいと思います。いかがでしょうか。貴重な裏情報も授けていただきました。

模型はぜひ非常に嬉しいオファーをいただきましたので、ぜひ検討させていただきます。

堀内：お願い致します。

司会：宜しくお願いします。ご質問宜しいでしょうか。では、これで第2回目のご講演を終了させていただきます。堀内先生どうもありがとうございました。